

遺跡でたどる 袋井のあゆみ



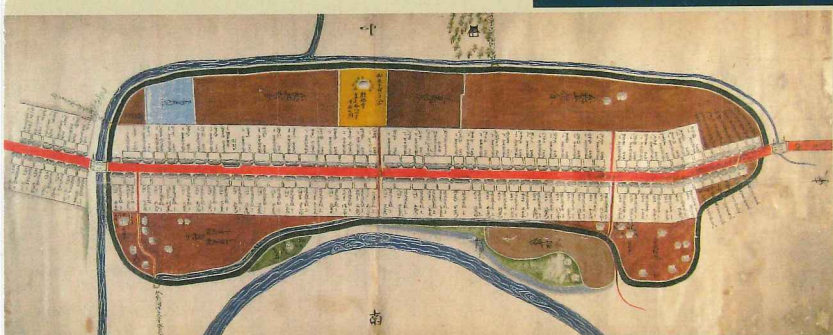
静岡県指定文化財「大野命山」



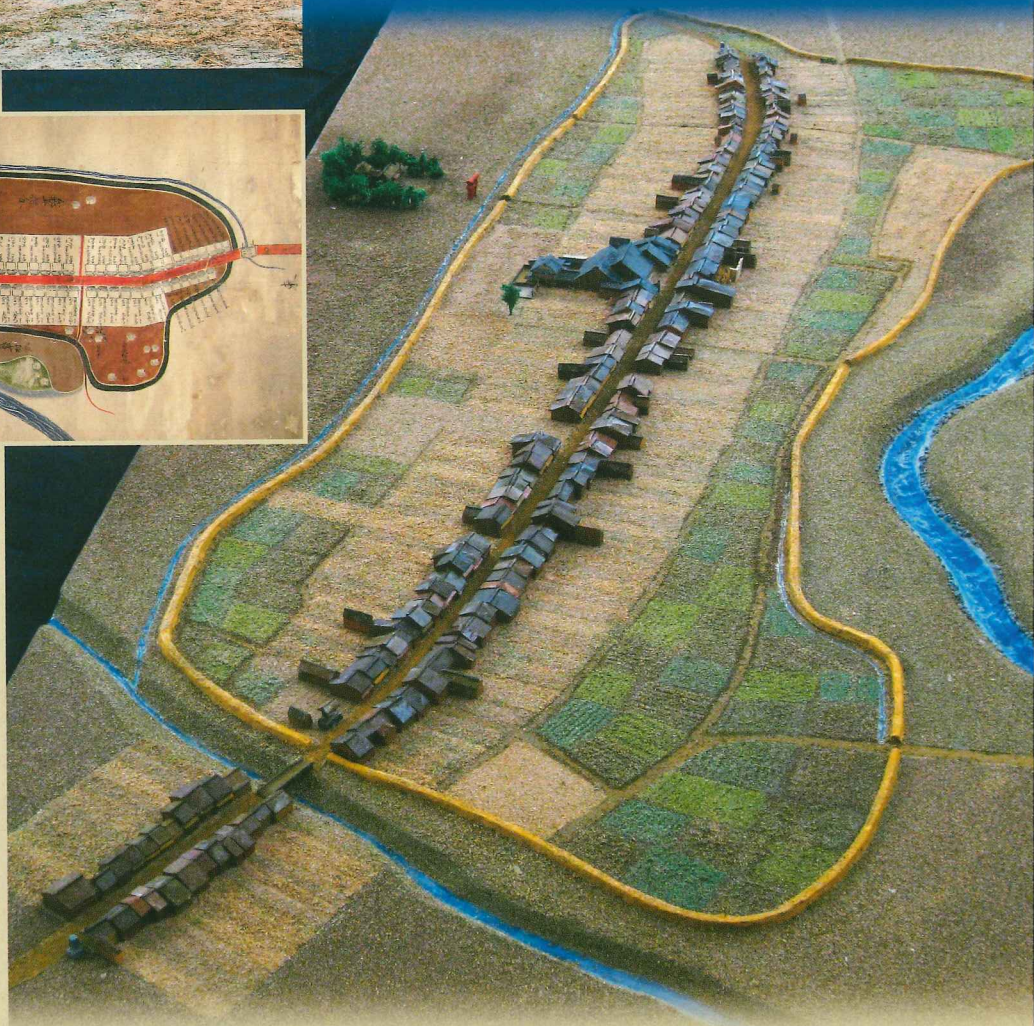
静岡県指定文化財「中新田命山」

第5弾

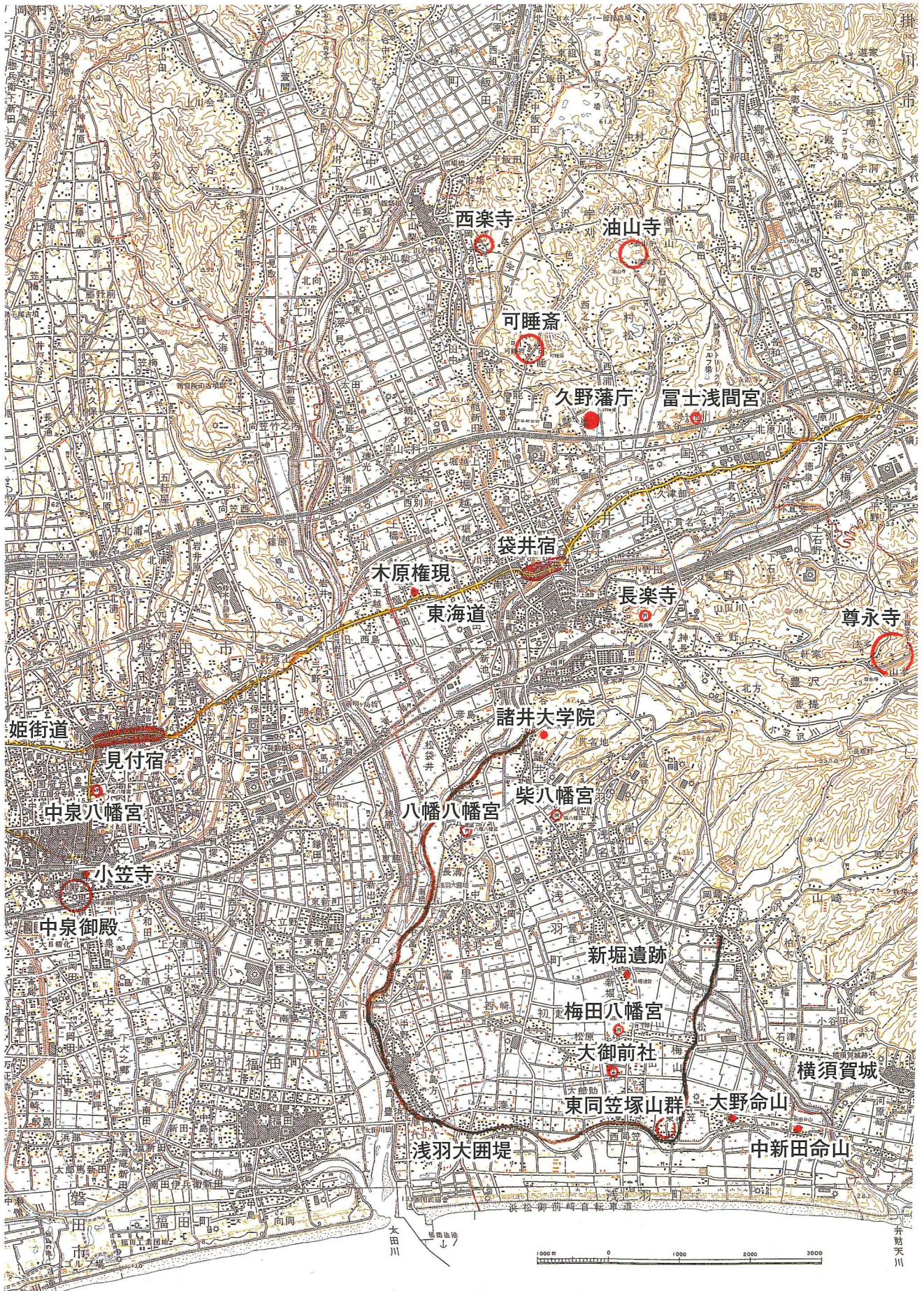
江戸時代の巻



袋井市指定文化財「袋井宿絵図」



江戸時代の主要な遺跡と社寺



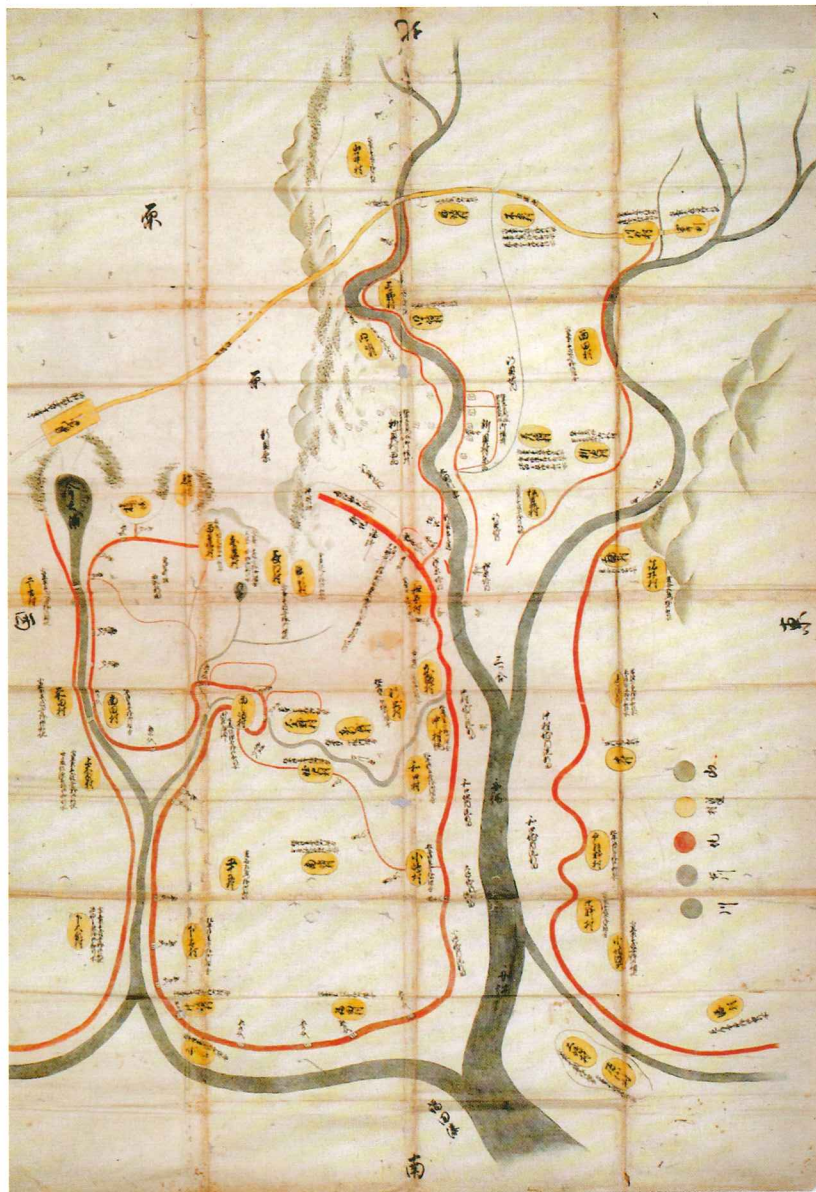
遺跡でたどる袋井のあゆみ —江戸時代の巻—

今回の内容は平成18年からシリーズで紹介している、「遺跡でたどる袋井のあゆみ」第5弾です。

時代劇や大河ドラマでおなじみの江戸時代。しかし、ひとくちに江戸時代と言っても260年以上にわたる長い期間で、人々の暮らしぶりや社会構造は、この間に大きく変化します。

静岡県内では東京のように江戸時代の遺跡を発掘することは珍しいのですが、袋井市南部の浅羽地域では新田開発や災害対策に関わる土木遺産が見られ、他には見ることができない遺跡が存在します。また、東海道袋井宿や戦国時代の終わりをつげる久野藩庁の造成など、特徴ある袋井の江戸時代の姿を、遺跡を中心にしながら、絵図や古文書などを使って見てゆきましょう。

原野谷川・太田川の改修と浅羽大囲堤の築堤



今之浦川・太田川・諸井川（原野谷川）流域絵図 江戸時代
(磐田市教育委員会所蔵)

原野谷川・太田川合流工事後の川筋と堤との関係を示す貴重な絵図。太田川と今之浦川の間も御厨大囲堤が囲む輪中でした。

かつての原野谷川と太田川とは合流せず、原野谷川は大きく蛇行しながら海岸砂堤の内側に沿って東へと流れ、浅羽地区と横須賀の境に深く入り込んだ潟湖に注ぎ込んでいました。

高低差の殆んどない浅羽低地を流れる原野谷川はたびたび洪水を繰り返し、湿地や池が多く見られました。

徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利をおさめ、慶長8年（1603）江戸に幕府を開くと、翌年には村落と農民を支配する基盤を整えるための遠州総検地が始まり、これと同時に太田川と原野谷川を合流させ、新しく川筋を掘って流路を付け替える大工事が行われました。

このときに排土を用いて新しい川筋に沿った堤が築かれ、浅羽大囲堤の原形は誕生したと考えられています。

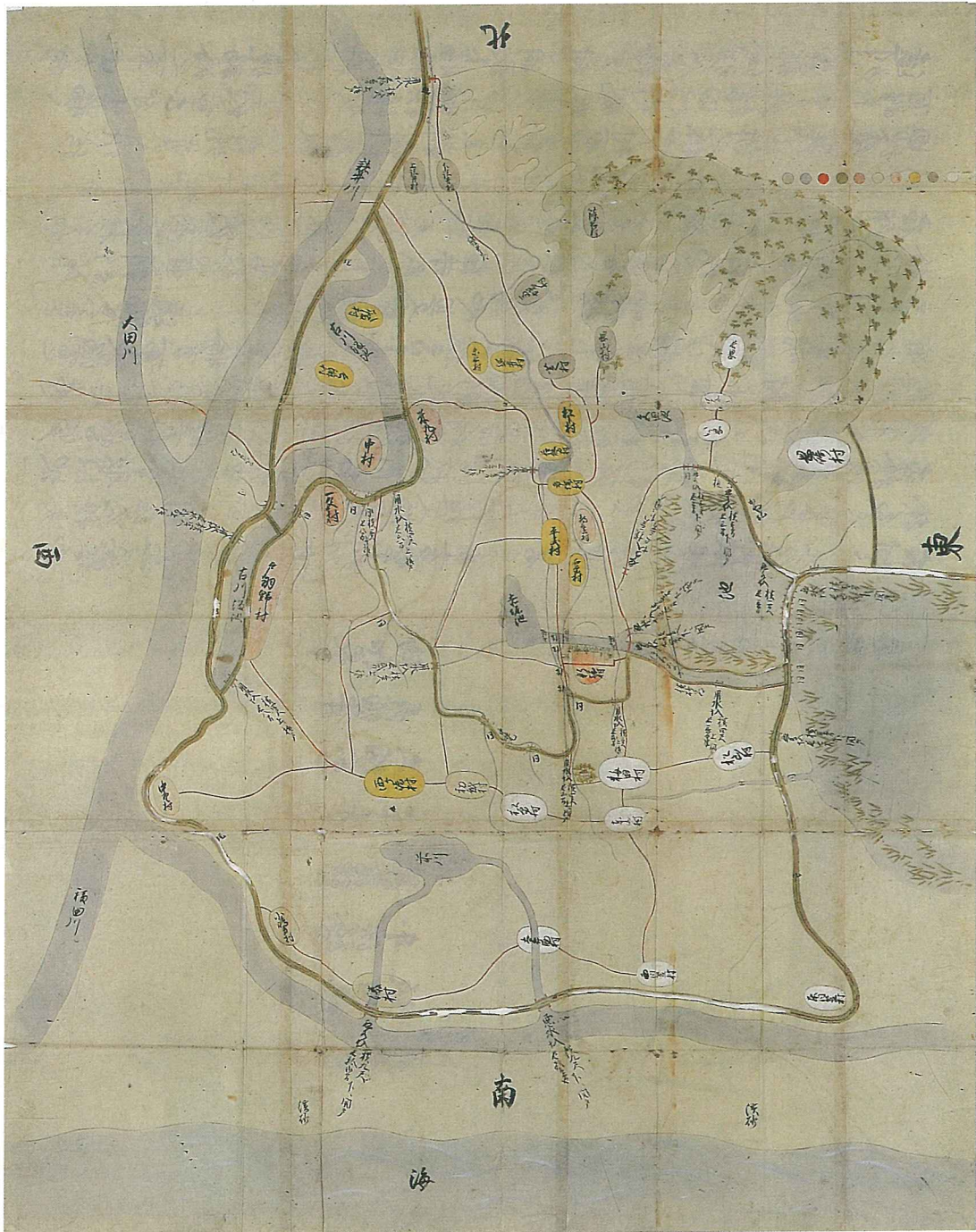
工事には幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次があたったとされます。当時始まった土木普請はこれだけに留まらず、太田川の西側でも御厨大囲堤が築かれ、さらに西の天竜川辺りへと続く堤が最終的には整えられ、海岸平野の新田開発は本格化しました。



昭和30年頃の浅羽大囲堤（湊）

浅羽大囲堤

浅羽低地を取り囲む大囲堤は全長12.7kmに及ぶ水除け堤で、堤には56艘の坊樋がありました。その規模は高さ3間、敷幅（下底幅）12間、馬踏（上の平らな所）9尺という大がかりなもので、堤に囲まれた33ヶ村をたびたび水害から守りました。しかし、圃場整備等によって現在は殆んど消滅しています。



浅羽庄水除堤争論裁許絵図 貞享3年(1686) 個人蔵 袋井市指定文化財

浅羽低地の真中を東西に延びる中畦堤の高さをめぐって上輪と下輪の村々が争論をくりかえしたときの、裁許状の絵図で、浅羽33ヶ村が堤・川道・用排水路とともに詳細に描かれ、江戸時代の地形や景観を復元する場合の、基準となる貴重な絵図です。



大囲堤の調査のようす 長溝地内

堤は、自然堤防の高まりを巧みに利用し、縁には土留めのために杭を打ち、その上に細かく盛土を叩き締めながら積み上げていました。

延宝の高潮災害と大野・中新田命山

延宝8年閏8月6日の高潮災害と築山の築造

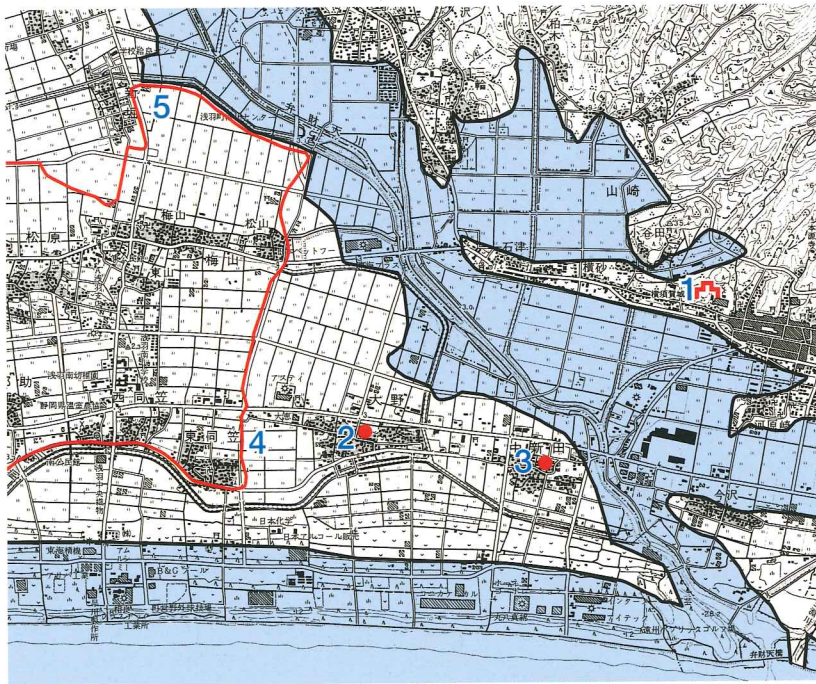
延宝8年（1680）閏8月6日には、江戸時代最大と言われる台風が襲い、中国地方から東海、関東、東北の広い範囲で大きな被害が生じました。

江戸では午前8時頃から10時にかけて最も風雨が激しくなり、3420軒が倒壊、本所深川では700余人が溺死しました。幕府の歴史書である、「徳川実紀」の『常徳院殿御実紀12巻』にも横須賀城下の被害記事が出ています。

浅羽・横須賀地域の詳細を記した『百姓伝記』によると「午前5時頃より風が吹き出し、午前10時頃には高潮が押し寄せ、多くの人馬が死亡、海はしけとなり、降る雨は海水のように塩辛く、打ち寄せる波は潮浸しとなり、この村では老若男女300人が死亡した」とあります。

当時の浅羽全域は横須賀藩領で、藩主は本多越前守利長でした。さっそく家中総動員で崩壊した堤・塚の修復にあたります。『横須賀根元歴代名鑑』には「普請にあたっては領主から扶持米（賃金）もせず、農民たちは困窮を極め、追い討ちをかけるようにさらに8600俵の年貢増加を行った。払えない百姓はつかまえて女房は水田の中に矢来を組んで水中に漬け、男は寒中に水を掛けて凍えさせ、殺した村もあった」と記しています。

このような状況のなか、生き延びた村人たちは藩の技術指導を受けて避難所の築山（人工の小山）を築きました。そのうち高潮が発生した時は築山に避難し、命を助けてくれる山ということで、「命塚」「助け山」「命山」と呼ばれるようになりました。



1680年頃の地形復元と命山の位置

- 1 横須賀城 2 大野命山 3 中新田命山
- 4 浅羽大囲堤
(浅羽三十三ヶ村を囲った堤、全長約13km)
- 5 中畦堤 (中世浅羽荘の堤、17世紀初頭に改修)



大野命山 静岡県指定文化財

規模・形態 南北32m、東西24m、高さ3.5mの長方形
土量 約1500m³
頂上平場の面積 136m²

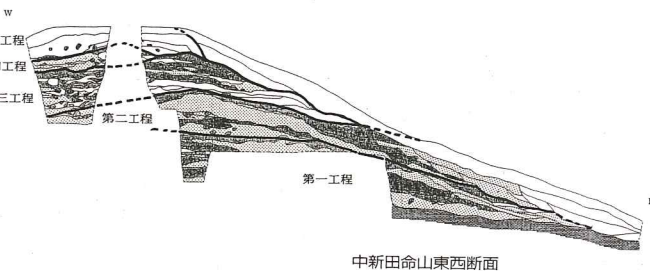
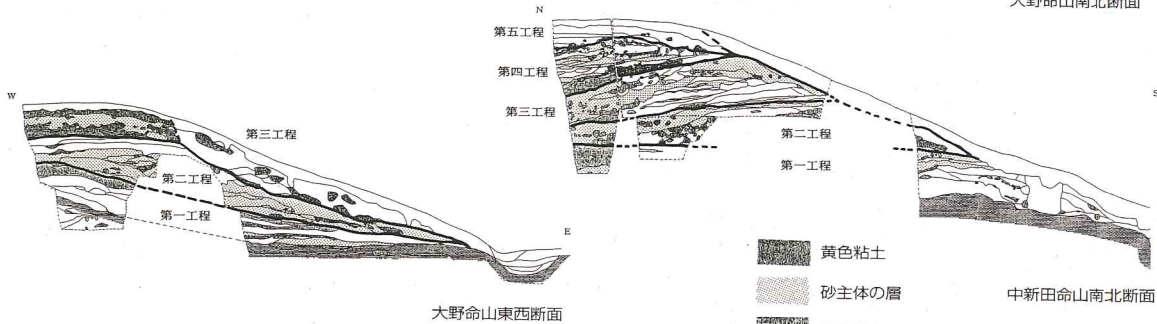
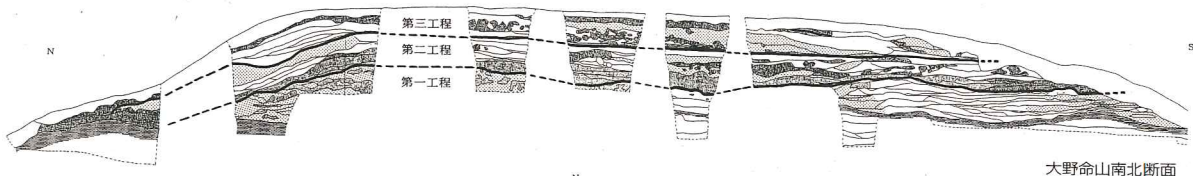
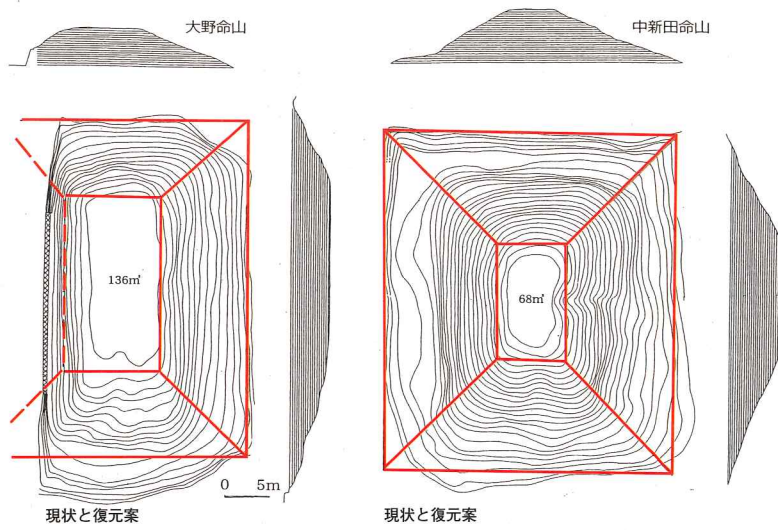






中新田命山 静岡県指定文化財

規模・形態 南北30.5m、東西27m、高さ5mの長方形

土量 約2200m³

頂上平場の面積 68m²



-  黄色粘土
-  砂主体の層
-  灰色粘土
-  地山土

盛土・作業工程の比較

大野では地山の直上からほぼ1mづつ、3回の工程に分けて斜面を除きその土を水平方向に積み上げる。

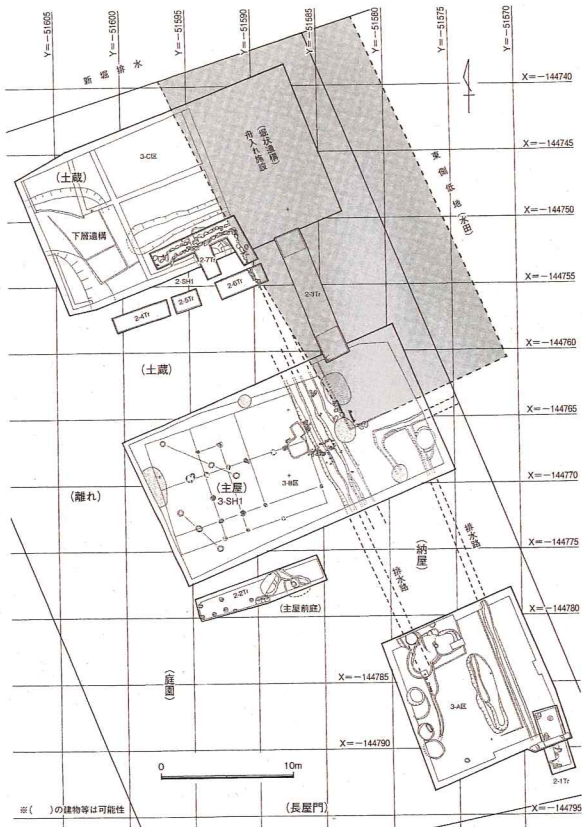
中新田では地山の直上1mほどは水平方向に積んで土台を造るが、その上には中心部に向けて傾斜を持たせるように積み上げ断面が三角形になっている。これを繰り返し、5回の工程で高さを確保している。

両者の違いは確保できた土の違いに起因しているようだ。大野は粘土が確保しやすかったのに対し中新田は砂地で、粘土の確保が容易ではなかったのだろう。

新田開発と村の形成 — 浅羽新堀村の誕生 —

浅羽低地には縄文海進に始まる潟湖（ラグーン）が深く入り込み、蛇行して流れる原野谷川はたびたび洪水を起こすなど、低地の至るところに池や湿地が広がる景観でした。この低地は遠州でも初期の新田開発が行われた地域で、戦国大名の今川氏によって16世紀中頃から手をつけ始められます。その拠点の一つが新堀村で、集落の西に広がっていた広大な赤堀池の水を吐かせるために排水路を掘って潟湖とつなぎ、これは「新堀」と呼ばれ、江戸時代の村の呼び名となりました。

平成18年におこなった調査で見つかった江戸時代の住居跡は、こうした新田開発を進めた庄屋クラスの宅地のあり方を具体的に教えてくれるものとなりました。



江戸時代の遺構配置

屋敷内に水路から直接水を引き込み船入れ施設を設けていました



江戸時代の新堀集落の中心部

水路として重要な新堀排水を挟んで新田開発の集落が形成されました



一括廃棄された陶磁器類



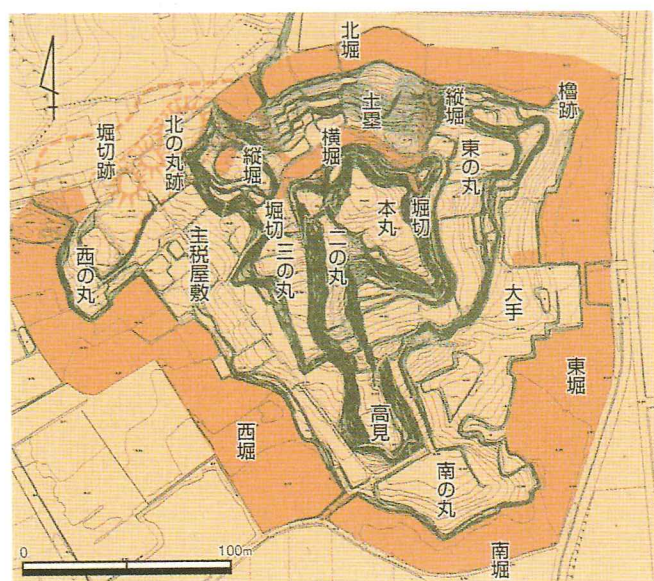
土坑に捨てられた陶磁器類は、17世紀前半のまとまった資料で、内耳鍋・かわらけ・常滑産水甕・播鉢・天目茶碗・丸椀・志都呂産小壺等があり当時の人々の暮らしぶりをしのばせてくれます

久野藩庁（久野城）の造成

元和5年（1619）、久野宗成の移封に伴い北条氏重が最後の城主として、久野城に入りました。氏重は保科正直の四男として生まれ、徳川家康にこわれて玉縄北条氏に養子に入り、田中城主（藤枝市）、掛川城主を歴任した人物です。

平成18年の調査では、山側の本丸と二の丸の建物を取り壊し、窪地を埋めて平に造成し、元の山の状態に戻している状況が確認できました。これに対し裾の平部にあたる南の丸、大手曲輪、三の丸下段、主税屋敷では堀側を埋め立て、平場の拡張を行っており、これらは北条期の改築と考えられます。

これら一連の造成は、元和元年（1615）に伏見城において発布された、国持大名に対し、本城を除く他の城郭について毀壊させる一国一城の制に準じたものと考えられ、本丸と二の丸などの山側では城塞としての機能を棄て、裾部に久野藩庁としての藩の公式式典の場、藩主の公邸、藩内の政務を司る役所の建物のみを集中させたものと見られます。



久野城では縄張り絵図が発見されていないので、小字名が残っている部分はそのまま生かして「〇〇丸」と呼んでいます、当時の呼称ではありません。



北条氏時代の瓦



埋め戻された本丸の建物跡

中央の黄色い地山部分が建物跡で、その周りには堀から運んだ黒い土で平に埋め戻している。



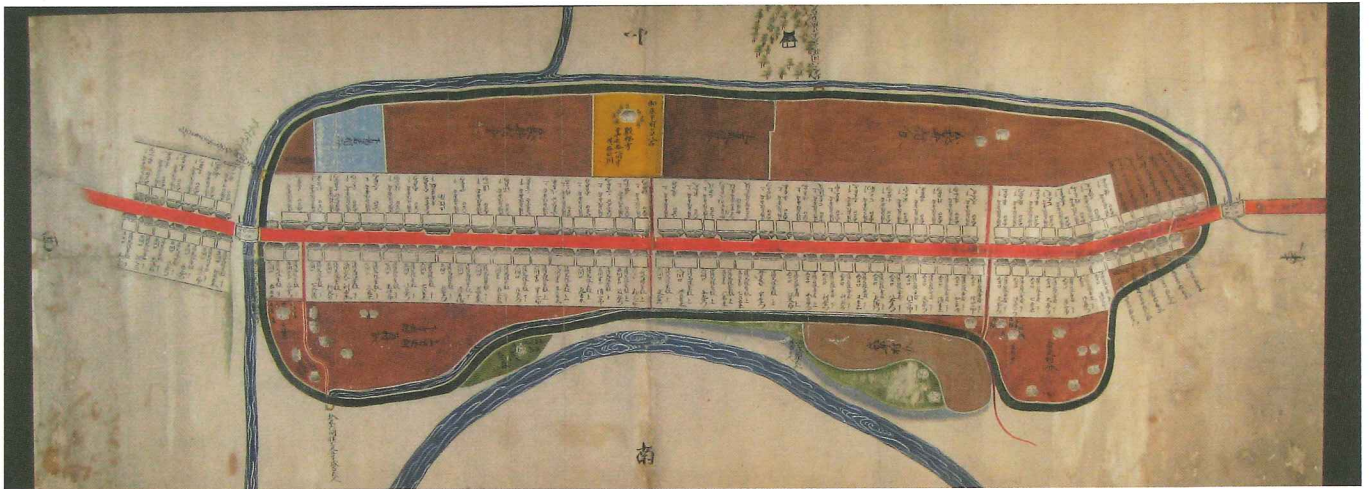
捨てられた瓦（二の丸）

取り壊された瓦葺き建物の使える瓦は、別の建物で使用するが、破損したり、不要になった瓦は、穴を掘って捨てている。

袋井宿の構造と東本陣跡の調査

徳川家康が江戸に幕府を開く二年も前、慶長6年（1601）には、「東海道五十三次」のほとんどの宿駅が開設され、袋井宿はそれから15年後の元和2年（1616）、幕府の領地として、紀伊大納言徳川頼宣が駿府にいたときに往還の利便のため、新たに開設したものです。

袋井宿は原野谷川、沖之川、宇刈川などに囲まれ水害にあいやすい立地だったことから、「袋井宿絵図」に描かれているように周囲に土塁をめぐるした宿場で、東の掛川宿と西の見付宿の間、見付へ一里半（約6km）の地点に定められた小規模な宿場でした。



「袋井宿絵図」（縦50.8cm、横137.4cm） 袋井市指定文化財



袋井宿復元ジオラマ（縦64cm、横140cm）

「袋井宿絵図」をもとに古い地籍図にあてはめ、500分の1の縮尺で復元したものです。



宿の中央にある東本陣は最も規模が大きく、周囲が板屋根なのに対して、ここには瓦葺の建物が集中しています。

天保一四年（一八四三）袋井宿の概要	
町並み	東西五町一五間
人口	八四三人
総家数	（男三七九人・女四六四人） 一九五軒
	本陣三軒、脇本陣なし
	旅籠屋五〇軒
	（大五軒、中二軒、小三軒）
	一一、四八六坪
宅地税免除	七石
問屋維持費	二七石
継飛脚維持費	二二三石一斗四升四合
伝馬人救済米	二七石
高札場	一カ所（中川土手際）
宿建人馬	一〇〇人、一〇〇疋
人馬継問屋場	一ヶ所（宿内本町）
役人	問屋一人、年寄二人、宿賄人三人、帳付四人、馬指二人、人足方二人、人馬下働四人

東（田代）本陣の構造

本陣には一般の旅行者は休泊できず、もっぱら大名や公家などの休泊に責任を負っていました。本陣の構造上の特徴は門構えと玄関があり、内部に「上段ノ間」が設けられていたことです。東本陣の場合、敷地全体の坪数は1,068坪で、この中に建坪が288坪、間口は13間半、奥行31間もありました。

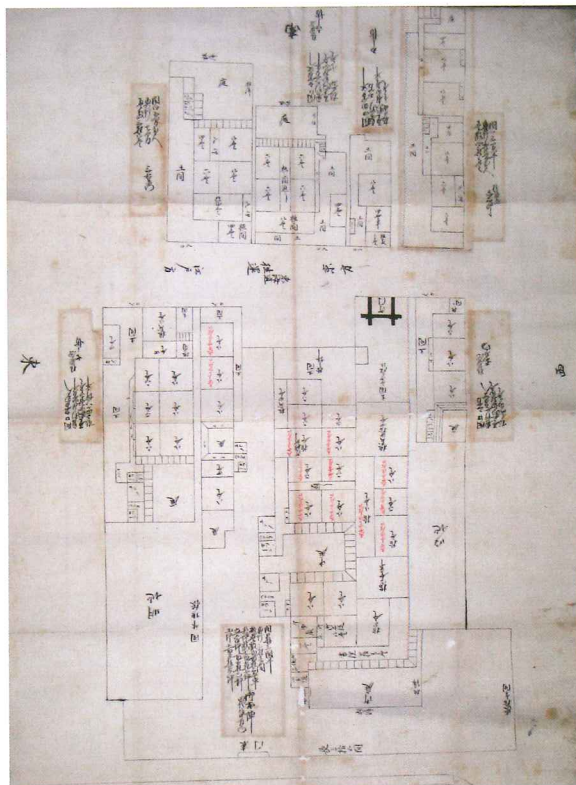
本陣の主な収入は休泊料ですが、これには特に決められた基準はなく、「御祝儀」と呼ぶにふさわしい性格のものでした。金銭だけではなく、裕羽織・反物・色紙などで支払われることも多かったようです。幕府から下賜金や各種の補助がありましたが、これだけの大規模な建物群を常に休泊できるよう維持するには大変な苦勞が伴いました。



平成3年度調査区全景



平成4年度調査区全景



田代本陣平面図 袋井市教育委員会蔵

袋井宿の本陣には東海道往還道の北側に東本陣・中本陣・西本陣の三カ所があり、三本陣の筆頭が田代家でした。往還を挟んだ南側の四軒の家と比較すると、規模の大きさがよくわかります。



東本陣の出土品

陶磁器類のうち圧倒的に多く出土したのが茶碗・湯呑・皿類などの飲食関係のもので、播鉢や鉢等の台所で使うものは少なく、宿場町出土陶磁器の特徴を現わしています。



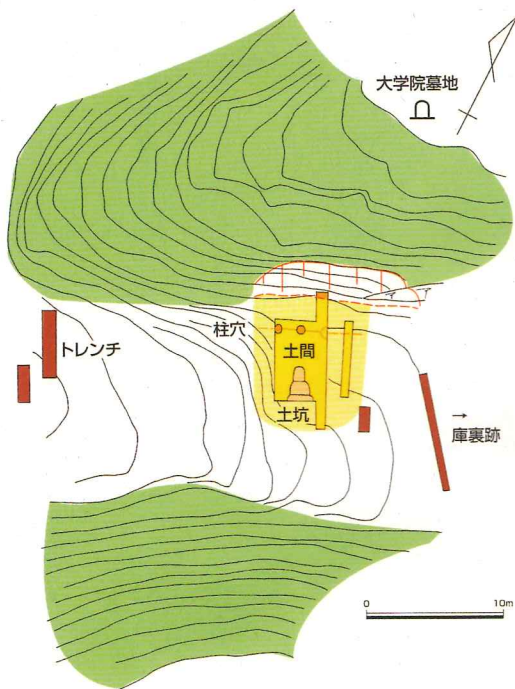
東本陣の出土品 土管

里に住み着く山伏 — 諸井大学院 —

江戸時代に新たな村の一員となる宗教者として山伏（修験者）を上げることができます。本来、山伏は霊山に房集落を構え、里の村々を巡って活動していましたが、徳川幕府の宗教者統制によって、霊山組織の多くが解体された結果、彼らは村の中に分散して住み着き、活動を行うように変化し、これを「里山伏」と呼びます。

諸井集落を見下ろす丘陵部に江戸時代初期に自房を構えた山伏大学院は金属の神である金山権現を祀り、その横の谷頭を「鍛冶屋」と呼んでいました。平成12年に、これを確認するための調査を実施し、本尊を祀る自坊とは別に谷の奥に小鍛冶を行う作業棟が設けられていることを確認しました。

近世初期の段階では山伏のような宗教者の中には、特殊な技術を持つものも多く、多様な活動を行っていましたが、やがてその活動は加持祈祷一色となり、村鎮守の祭主になるなど、地域にとって欠かすことができない存在となってゆきました。



「鍛冶屋」を中心とした大学院の景観



大学院の本尊

明治になるまで、大学院の房で祀られていた、当山派修験（真言系）の本尊で、中心に不動明王、右に修験道の開祖・役行者、左に醍醐寺を開き、当山派修験の開祖とされる、理源大師聖宝の三尊を祀っていました。



「鍛冶屋」の作業場跡

南向きの緩斜面に盛土を行い、粘土を張って床面を設け、その上に屋根を掛けた小鍛冶の作業場跡が見つかりました。床面からは、700点近い湯玉（熱い鉄を鍛えるときに飛び散る破片）が見つかりました。



床面の土坑

床面の中央部には、フイゴを据えたのではないかと考えられる浅い土坑と作業を行うための穴の痕跡が見つかりました。

祀りと供養



卒塔婆を立てた供養の痕跡 土橋遺跡

国道一号袋井バイパスの建設に先立ち、昭和57～59年にかけて行われた発掘調査で、江戸時代中期の川跡と堰の杭列が見つかり、その傍らに、14本の卒塔婆が立てられている状況が発掘されました。川施餓鬼か流灌頂に関するものと考えています。



14本の卒塔婆は皮付きの生木の片面を削ったところに墨書してあり、本来は1m程あったと思われます。卒塔婆の中には、宝永7年(1710)、正徳4年(1714)の年号が記されたもの、観音經の一節が記されたものもあります。



火葬蔵骨器が出土するようす 上石野1号墓



火葬跡 高尾・掛之上遺跡



蓬萊鏡が出土したようす 高尾・掛之上遺跡



蓬萊鏡(須弥山)
(全長23.9cm、鏡面14.9cm) 【江戸中期】

遺跡でたどる袋井のあゆみ 第5弾 江戸時代の巻

編集 袋井市立浅羽郷土資料館 TEL 0538-23-8511

発行 袋井市教育委員会 生涯学習課文化財係

本書は資料館企画展の内容にもとづいた文化財啓蒙資料です